

かなり混じる。従って、本報告の音調は伝統方言とは相当ずれている可能性がある。

那覇 体系未詳のため、とりあえず「発音したとおり」「聞こえたとおり」の音調を部分的に提示することとする。

音調表記は、可能な限り、大幅な上昇を〔で、下降を〕で示す。文末の拍の上昇調については、原則として〔で示すが、終わってから2番目の拍が「高」でそこからさらに上昇する場合に限って、文末に↑の記号を用いる場合がある。例：ほんまに〔見〕〔タ？、〔知らん↑？(関西中央部の方言の例)

当該部分の音調型を確定するため、上記1～6の各用法につき、体言無核、体言有核、動詞無核、動詞有核、形容詞無核、形容詞有核の情報をそろえて提示するのが望ましいわけだが、用法によっては使用される文脈に限られていることなどもあって、必ずしも揃っていない場合もある。

## 4. 結果の概要

### 4. 1 結果のまとめ

下表に結果の概要をまとめる。表中の語形に付けた「a b」は同じ語形で音調が異なる場合に付けたものである。各欄の語形は網羅的ではなく、類似語形をまとめた場合がある。( )内は省略できるもの。

音調記号は、上記のように、本稿では上昇〔と下降〕によるが、下表に限って、有核の後に付いた場合に消える下降を'で、有核の語の後に付いた場合にも消えない上昇・下降をそれぞれ[・]で示す。このうち'の表記は抽象的なので、5節以下で具体的な方言を扱うときには使わない。文末詞語頭の'は和田實の低接性と同一。語中の'は有核語についた場合も完全消滅しない場合もあるかもしれないが、消滅が普通と考え、低接性と同一扱いとした。文末詞語頭の[は、高く終わる語に付いた場合、それよりさらに1段高く付くことはなく、前に付く語の「高」と同じ高さで始まる。鹿児島と那覇は、分析不十分でこの表には音調記号を付けない(5節では付ける)。

	関西中央	姫路北	香川	岐阜	東三河	岡山北	岡山南	山口西	鹿児島	那覇	例文(関西中央)
1 認識形成の要請	'ヤン(カ)	'ヤロケ	'ヤン(カ)、 体言類のみ[ヤツ]テも	'シ、 'ゲ、 ヤン(カ)a	ジャ'ン (カ)	'ガンa	'ガーa	ツ'チャa、 ヤンa	シ、 ジャン	ヤツシa、 サーa	(目の前の眼鏡に気づいていない相手に)〔め〕がね、そこ〔に〕あ〔る〕やん!
2 独言：発見	'ヤン(カ)	'ヤロケ	'ヤン(カ)	'シ、'ゲ、 ヤン(カ)a	ジャ'ン、 (ジャ'ンカ?)	'ガンa	'ガーa	ヤンa	シ、 ジャン	ヤツシa、 サーa	(空の教室に来て独言)〔あつ休講〕やん!
3(a) 認識生成のアピール：発見	'ヤン(カ)	'ヤロケ	'ヤン(カ)	ヤン(カ)a	未詳	'ガンa	'ガーa	ヤンa	ジャン	ヤツシa、 サーa	(山本さんに向かつて)〔山本さん〕やん!
3(b) 認識生成のアピール：評価意見	'ヤン(カ)	'ノニ	'ヤン(カ)	ヤン (カ)a、'シ	未詳	'ガンa	'ガーa	ツ'チャa、 ヤンa	ジャン	ヤツシa、 サーa	[そのジャ]ケットにあってる]やん。(似合)
4 共通認識の喚起	'ヤン[カ]ー、 'ヤ[ン]	'ノニ	'ヤン[カ]ー、 'ヤ[ン]	[ヤ]ンb、 ヤン[カ]ー	ジャ'ン、 ジャ'ン [カ]ー	[ガ]ンb	[ガ]ーb	ツ'[[チャ b、 ツ'チャ [ネ、 [ヤ]ンb	シ、 シー、 ジャン	ヤツシab、 サーab	(君も知っての通り)〔ぼくの〕いえ、〔せ〕まいやん。
5 情報提示、話題の導入	'ンヤン [カ]ー、 'ン[ヤ]ン 等	'ノ[ニ]ー	'ン[ヤツ] テa、 'ン[ヨ]ー	'ンヤ[テ]ー、 'ン[ヨ]ー	ジャ'ン、 ジャ'ン [カ]ー、 ジャ'ン [ネ]ー	'ンジャ [ガ]ン、 'ン[ヨ]ー	'ンジャ [ガ]ー、 ン[ヨ]ー	'ソツ[チ ヤ、 'ホツ[チャ	ンダツテ	バーテー、 バーヨ (ー)、 バーヨナー	(聞き手の未知の情報)〔あの子結婚する〕んやん[か]ー。
6 決意表明	'ヤン(カ)	×	×	×	未詳	×	×	×	シ	×	受け[て]立 った[る]や ん。
cf. ノダ文の伝聞(～するんだって)	'ンヤツ[テ]等	'ンヤツ[テ]	'ンヤツ[テ]b	'ンヤ[ト]、 'ンヤツ[テ]	未詳	'ンジャツ[テ]	'ンジャツ[テ]	ツ'テ*	ンダツテ	ツテヨ*	[結婚する]んやって。

\*山口西ツテ、那覇ツテヨはノダ文ではなく、動詞終止形に付いたもの

## 4. 2 使用する語形の相違による用法の分類

上表の6用法は、語形の面から、およそ四つにグループ分けされる。

- A : 1 認識形成の要請、2 独言：発見、3 認識生成のアピール a b
- B : 4 共通認識の喚起
- C : 5 情報提示・話題の導入
- D : 6 決意表明

このうち、3 認識生成のアピールの用法(a)(b)については、例文ごとの諸方言の語形のばらつきから考えて、枠組の再整理が必要かもしれない。6 決意表明はぴったり該当する表現がない方言が目立つ。但し調査方法が関係しているかもしれない。

## 4. 3 新方言形の多さ

各用法で用いられる語形は新方言形が多いようである。上の世代ではぴったり一致する表現がない場合も目立つ。ヤン(カ)・ジャン(カ/ネ)は、ほとんどの地域で明治以降に発生した語形であることが知られている(例えば井上・鎌水 2002)。姫路のノニ(一)は最近の若い世代に限られるらしい(都染 2006)。岡山北部のガンも新形らしい(後述の識者の御教示による)。

5 情報提示・話題導入の表現はさらに新しく、最近の若い世代で発生したものが目立つようである。この用法の関西中央部などのヤン(カー)が新しいことは種々の文献で指摘されているとおりであるし、香川のヤッテもそうらしい。他方言については詳細未詳だが、同様である可能性が高い。5は音調語形の面で4 共通認識の喚起に比較的近い方言が多いが(東三河については同じ語形音調の場合さえある)、これは、両者がともに出現位置が対話的テキストの隣接対第1 発話相当位置であり、後に続く話の導入あるいは土台であることを示すという点が共通しているからだと考えられる。4 共通認識の喚起も、1 認識形成の要請よりは新しい方言が目立つかもしれない。

本稿は現象の報告に留まるが、各地で類似の用法を持ちながら、さまざまの語形の新方言形が現れた理由について考察が必要である。

本稿の記述は、全般に、当該地区の老年層の方言とは一致しない点が非常に多いはずである。

## 4. 4 語源

各語形を語源の面からまとめておく。但し那覇は未詳の点が多いので除き、また、用法5にはノダのノ相当の語が含まれる(山口のソ・ホも元来はこの意味を含むらしい)のでそれを除くと、なお不明確な点も多いが、以下のようにまとめられると考える。

- ①助動詞断定+否定+(反語など) : ヤン(カ(一))、ジャン(カ(一))、ネー
- ②助動詞推量+反語 : ヤロケ
- ③逆接接続助詞を含む : ノニ(一)、ガー、ガン?、ゲ(←\*ガイ?)
- ④その他の接続助詞を含む : シ
- ⑤引用・伝聞の表現を含む : ヤッテ、ツチャ、ヤテー

## 4. 5 音調

音調について、全体として顕著なのは、以下の3点である。

①1 認識形成の要請、2 独言：発見、3 認識生成のアピール a b・6 決意表明の用法では、末尾の音節が低く平坦である(全報告者)。  
②5 情報提示・話題導入の用法では、末尾が長音節(〇一、〇ン)で、かつその音節に音調の山が現れて…[〇]一、…[〇]ンのような方言が多い。(末尾音節ではなく、次末音節に音調の山が現れる方言もある)。この音調は、共通語の間投助詞ネー・サーや、それを省略した「尻上がり音調」(例：ワ[タシ[ワ]一、コ[レカ[ラ]一…。音調実質は決して単に上がるだけではない)に類似しており、ともに聞き手に話を持ちかけ、それに引き入れるといった機能を持っていると考えられる。尻上がり音調は非常に新しいから、それに影響されたとすれば、この⑤情報提示・話題導入の音調は一層新しいということになる。興味深いことに、これらの音調は山口にはなく、鹿児島・那覇でもあまり使わない。首都圏からの距離が大きい地域ではこの音調がまだ普及していないことであろうか。

③4 共通認識の喚起は、⑤情報提示・話題導入の用法と類似した語形・音調になることが多い。しかしながら、姫路北部や東三河では1 認識形成の要請などと同じ語形・音調が(も)あり、また京都市方言でも上の世代では1 認識形成の要請と同じ語形・音調がある(中井 2008)。これについて、「4 共通認識の喚起の用法は、1 認識形成の要請から派生した場合が多く、派生当初は1と同じ音調である方言も多かったが、意味用法の違いに応じて、異なる音調を生み出した方言が多かった」と一応考えておく。